

# 杜松の樹

グリム

中島孤島訳

青空文庫



むかしむかし 大昔、今から二千年も前のこと、一人の金持ちがあつて、美しく、氣立の善い、おかみさんを持つて居ました。この夫婦は大層仲が好かつたが、小児がないので、どうかして一人ほしいと思ひ、おかみさんは、夜も、昼も、一心に、小児の授かりますようにと祈つておりましたが、どうしても出来ませんでした。

さてこの夫婦の家の前の庭に、一本の杜松がありました。或る日、冬のことでしたが、おかみさんはこの樹の下で、林檎の皮を剥いていました。剥いてゆくうちに、指を切つたので、雪の上へ血がたれました。（\*（註）杜松は檜類の喬木で、一に「ねず」

又は「むろ」ともいいます)

「ああ、」と女は深い嘆息を吐いて、目の前の血を眺めているうちに、急に心細くなつて、こう言つた。「血のように赤く、雪のように白い小児が、ひとりあつたらねい！」

言つてしまうと、女の胸は急に軽くなりました。そして確かに自分の願がとどいたような気がしました。女は家へ入りました。それから一月経つと、雪が消えました。二月すると、色々な物が青くなりました。三月すると、地の中から花が咲きました。四月すると、木々の梢が青葉に包まれ、枝と枝が重なり合つて、小鳥は森に餌を起こして、木の上の花を散らすくらいに、歌い出しました。五月経つた時に、おかみさんは、杜松の樹の下へ行きまし

たが、杜松としようの甘あまい香か気おりを嗅かぐと、胸むねの底そこが躍おどり立たつような気きが  
 して来きて、嬉うれしさに我われしらずそこへ膝ひざを突つきました。六月つきめ目が過す  
 ぎると、杜松ねずの実みは堅かたく、肉にくづいて来きましたが、女おんなはただ静じつし  
 て居いました。七月つきになると、女おんなは杜松ねずの実みを落おとして、しきりに食た  
 べました。するとだんだん気きがふさいで、病びよう気きになりました。  
 それから八月つきた経とつた時ときに、女おんなは夫おんなおつとの所ところへ行いつて、泣なきながら、こ  
 う言いいました。

「もしかわたし死しんだら、あの杜松としようの根元ねもとへ埋うめて下くださいね  
 」。

これですつかり安あん心しんして、嬉うれしそうにしているうちに、九月つき  
 が過すぎて、十月つきめ目めになつて、女おんなは雪ゆきのように白しろく、血ちのように赤あか

い小児こどもを生うみました。それを見みると、女おんなはあんまり喜よろこんで、とうとう死しんでしまいました。

夫おつとおんなは女なを杜松としようの根元ねもとへ埋うめました。そしてその時ときには、大たいへ変んに泣なきました。時ときが経たつと、悲かなしみもだんだん薄うすくなりました。それから暫しばらくすると、男おとこはすっかり諦あきらめて、泣なくのをやめました。それから暫しばらくして、男おとこは別べつなおかみさんおんなをもらいました。

二度目どめのおかみさんには、女おんなの子こが生まうれました。初はじめのおかみさんの子こは、血ちのように赤あかく、雪ゆきのように白しろい男おとこの子こでした。おかみさんは自分じぶんの娘むすめを見みると、可かわ愛あくつて、可かわ愛あくつて、たまらないほどでしたが、この小ちいさな男おとこの子こを見みるたんびに、いやな気き持もちになりました。どうかして夫おつとの財ざい産さんをのこ残のこらず自分じぶんの娘むすめにやり

たいものだが、それには、この男の子が邪魔になる、というよう  
 な考えが、始終女の心をはなれませんでした。それでおかみさ  
 んは、だんだん鬼のような心になって、いつもこの子を目の敵に  
 して、打ったり、敲いたり、家中を追廻したりするので、  
 かわいそうな小児は、始終びくびくして、学校から帰つても、  
 家にはおちついていられないくらいでした。

或る時、おかみさんが、二階の小部屋へはいつていると、女の  
 子もついて来て、こう言いました。

「母さん、林檎を頂戴。」

「あいよ。」とおかあさんが言つて、函の中から美しい林檎を出  
 して、女の子にやりました。その函には大きな、重い蓋と頑固な

鉄てつの錠じょうが、ついていました。

「母かあさん、」と女おんなの子こが言いった。「兄にいさんにも、一つあげないこと？」

おかあさんは機嫌きげんをわるくしたが、それでも何気なにげなしに、こういいました。

「あいよ、学がっこう校こうから帰かえつて来きたらね。」

そして男おとこの子こが帰かえつて来くるのを窓まどから見みると、急きゆうに悪魔あくまが心こころの中なかへはいつても来きたように、女おんなの子この持もっている林檎りんごをひったくつて、

「兄にいさんより先さきに食たべるんじやない。」

と言いいながら、林檎りんごを函はこの中なかへ投なげ込んで、蓋ふたをしてしまいました。



そこへ男の子が帰つて来て、扉の所まで来ると、悪魔のついた  
 継母は、わざと優しい声で、

「坊や、林檎をあげようか？」といつて、じろりと男の子の顔を  
 見ました。

「母さん、」と男の子が言った。「何て顔してるの！ ええ、林  
 檎を下さい。」

「じやア、一しよにおいで！」といつて、継母は部屋へはいつ  
 て、函の蓋を持ち上げながら、「さア自分で一個お取りなさい。」

こういわれて、男の子が函の中へ頭を突込んだ途端に、ガタン  
 と蓋を落したので、小児の頭はころりととれて、赤い林檎の中へ  
 落ちました。それを見ると、継母は急に恐ろしくなつて、「ど

うしたら、脱のがれられるだろう？」と思おもいました。そこで継母まははは、自分じぶんの居室いまにある箆たんすのところに行いって、手近てぢかの抽斗ひきだしから、白しろい手巾はんけちを出だして来て、頭あたまを頸くびに密着くつつけた上うえを、ぐるぐると巻まいて、傷きずの分わからないようにし、そして手てへ林檎りんごを持もたせて、男おとこの子こを入いりぐちの椅子いすの上うえへ坐すわらせておきました。

間まもなく、女おんなの子このマリちゃんが、今いまちようど、台だい所どころで、炉ろの前まえに立たって、沸にえ立たった鍋なべをかき廻まわしているお母かあさんのそばへ来きました。

「母かあさん、」とマリちゃんが言いった。「兄にいさんは扉との前まえに坐すわって、真ま白しろなお顔かおをして、林檎りんごを手てに持もっているのよ。わたしがその林檎りんごを頂ちようだい戴だいと言いつても、何なんとも言いわな**い**んですもの、わたし

怖こわくなツちやつたわ！」

「もう一遍べんい行いつてごらん。」とお母かあさんが言いつた。「そして返事へんじをしなかつたら、横よこ面こつを張はつておやり。」

そこでマリちゃんまたいは又行いつて、

「兄にいさん、その林檎りんごを頂ちようだい戴だい。」

といいましたが、兄にいさんは何なんとも言いわないので、女おんなの子こが横よこ面こつを張はると、頭あたまがころりと落おちました。それを見みると、女おんなの子こは恐こわくなつて、泣なき出だしました。そして泣なきながら、お母かあさんの所ところへ駈かけて行いつて、こう言いいました。

「ねえ、母かあさん！ わたし兄にいさんの頭あたまを打うつて、落おつしちまつたの

！」

そう言つて、女の子は泣いて、泣いて、いつまでもだまりません  
でした。

「マリちゃん！」とお母さんが言つた。「お前、何でそんなこと  
をしたの！ まア、いいから、黙つて、誰にも知れないようにし  
ておいでなさいよ。出来ちまつたことは、もう取返しがつかな  
いんだからね。あの子はスープにでもしちまいましたよ。」  
こういつて、お母さんは小さな男の子を持つて来て、ばらばらに  
切りはなして、お鍋へぶちこんで、ぐつぐつ煮てスープをこしら  
えました。マリちゃんはそのそばで、泣いて、泣いて、泣きとお  
しましたが、涙はみんなお鍋のなかへ落ちて、その上塩をいれな  
くてもいいくらいでした。お父さんが帰つて来て、食卓の前へ

坐ると、

「あの子は何処へ行つたの？」と尋ねました。

すると母親は、大きな、大きな、お皿へ黒いスープを盛つて、運んで来ました。マリちゃんはまだ悲しくつて、頭もあげずに、おいおい泣いていました。すると父親は、もう一度、

「あの子は何処へ行つたの？」とききました。

「ねえ、」とお母さんが言った。「あの子は田舎へ行きましたの、ミユツテンの大伯父さんのところへ、暫く泊つて来るんですつて。」

「何しに行つたんだい？」とお父さんが言った。「おれにことわりもしないで！」

「ええ、何ですか、大へん行きがたつて、わたしに、六週間

だけ、泊りにやってくれツて言いますの。先方へ行けばきつと大切にされますよ。」

「ああ、」とお父さんが言った。「それは本当に困ったね。全体、おれに黙つて行くなんてことはありやしない。」

そう言つて、食事を初めながら、お父さんはまた、

「マリちゃん、何を泣くの？」とききました。「兄さんは今にきつと帰つて来るよ。」

それから、おかみさんの方を見て、

「おい、母さん、これはとても旨いぞ！、もつともらおう！」と  
いったが、食べれば食べる程、いくらでも食べられるので、「もつとくれ！ 残すのは惜しい、おれが一人でいただきますまおうよ

。「といいいながら、とうとう一人で、みんな食べてしまつて、骨  
テーブル卓の下へ投げました。

するとマリちゃんは、自分の箆笥へ行つて、一番下の抽斗か  
 ら、一番上等の絹の手巾を出して来て、食卓の下の骨を、  
 一つ残らず拾い上げて、手巾へ包み、泣きながら、戸外へ持っ  
 て行きました。マリちゃんはその骨を杜松の樹の根元の草の中へ  
 置くと、急に胸が軽くなつて、もう涙が出なくなりました。

その時、杜松の樹がザワザワと動き出して、枝と枝が、まるで  
 手を拍つて喜んでるように、着いたり、離れたり、しました。  
 すると木の中から、雲が立ちのぼり、その雲の真中で、ぱつと  
 火が燃え立つたと思うと、火の中から、美しい鳥が飛び出して、

善い声こえをして歌うたいながら、中空なかぞら高く舞まいのぼりました。

鳥とりが飛とんで行いつてしまふと、杜松ねずの木きは又元まもとの通とおりになりまし

たが、手巾はんけちは骨ほねと一ひとしよに何処どこへか消きえてしまいました。マリ

ちゃんは、すつかり胸むねが軽かるくなつて、兄にいさんがまだ生いきてでもい

るよこころうな心こころ持もちがして、嬉うれしくつてたまらなかつたので、機嫌きげん

よく家うちへ入はいつて、夕ゆう飯はんを食たべました。

ところが、鳥とりは飛とんで行いつて、金工かざりやの家根やねへ棲とまつて、ここう

歌うたい出だしました。

「母かあさんが、わたしを殺ころした、

父とうさんが、わたしを食たべた、

妹いもうとのマリちゃんが、



わたしの骨ほねをのこらず拾ひろつて、

手巾はんけちに包つつんで、

杜松ねずの樹きの根元ねもとへ置おいた。

キーウイツト、キーウイツト、何なんと、綺麗きれいな鳥とりでしょう！」

金工かざりやは仕事場しごとばへ坐すわつて、黄金きんの鎖くさりを造つくつていましたが、家根やね

の上うえで歌うたっている鳥とりの声こえを聞きくと、いい声こえだと思おもつて、立たちあ上あつ

て見みに来きました。けれども闕しきいを跨またぐ時ときに、片方かたほうの上うわぐつ沓が脱ぬげ

たので、片足かたあしには、上沓うわぐつを穿はき、片足かたあしは、沓下くつしただけで、

前まえ垂だれを掛かけ、片手かたてには、黄金きんの鎖くさり、片手かたてには、ヤットコを持もつ

て、街まちの中なかへ跳とびだ出だしました。そして日に光こうの中なかへ立たつて、鳥とりを眺なが

めて居いました。

「鳥や、」と金工が言った。

「何ていい声で歌うんだ。もう一

度、あの歌を歌って見な。」

「いえいえ、」と鳥が言った。「ただじやア、二度は、歌いませ

ん。それとも、その黄金の鎖を下さるなら、もう一度、歌いまし

よう。」

「よしきた、」と金工が言った。「それ黄金の鎖をやる。さア、

もう一度、歌って見な。」

それを聞くと、鳥は降りて来て、右の趾で黄金の鎖を受取り、

金工のすぐ前へ棲つて、歌いました。

「母さんが、わたしを殺した、

父さんが、わたしを食べた、

妹いもうとのマリちゃんが、

わたしの骨ほねをのこらず拾ひろつて、

手はんけち巾つつに包つつんで、

杜松ねずの樹きの根元ねもとへ置おいた。

キーウイット、キーウイット、何なんと、綺きれい麗いな鳥とりでしよう！」

歌うたつてしまうと、鳥とりは靴屋くつやの店みせへ飛とんで行ゆき、家根やねの上うえへ棲とま

つて、歌うたいました。

「母かあさんが、わたしを殺ころした、

父とうさんが、わたしを食たべた、

妹いもうとのマリちゃんが、

わたしの骨ほねをのこらず拾ひろつて、

手巾はんけちに包つつんで、

杜松ねずの樹きの根元ねもとへ置おいた。

キーウイット、キーウイット、何なんと、綺麗きれいな鳥とりでしよう！」

靴屋くつやはこれを聞きくと、襦衣シヤツのまんまで、戸外そとへ駈出かけだして、眼めの上うへへ手てを翳かざして、家根やねの上うへを眺ながめました。

「鳥とりや、」と靴屋くつやが言いった。「何なんて好いい声こえで歌うたうんだ！」

そう言いつて、家うちの中なかへ声こえをかけました。

「女房にようぼうや、ちよいと来きなよ、鳥とりが居いるから。ちよいとあの鳥とり

を見みな！いい声こえでうたうから。」

それから娘むすめだの、子供こどもたちだの、職しよくにん人だの、小僧こぞうだの、女じ

中よちゆうだのを呼よびましたので、みんな往來おうらいへ出でて、鳥とりを眺ながめま

した。鳥とりは赤あかと緑みどりの羽はねをして、咽のどのまわりには、黄金きんを纏まとい、二つの眼めを星ほしのようにきらきら光ひからせておりました。それはほんとうに美事みごとなものでした。

「鳥とりや、」と靴屋くつやが言いった。「もう一度ど、あの歌うたを歌うたって見みな。」

「いえいえ、」と鳥とりが言いった。「ただじゃア、二度どは、歌うたいません。それとも何なにかくれますか。」

「女にようぼう房ぼうや、」と靴屋くつやが言いった。「店みせへ行いって、一番上ばんじょうの棚たなに、赤靴あかぐつが一足そくあるから、あれを持もって来きな。」

そこで、おかみさんは行いって、その靴くつを持もって来きました。

「さア、鳥とりや、」と靴屋くつやが言いった。「もう一度ど、あの歌うたを歌うたって見みな。」

すると鳥はおりて来て、左の爪で靴を受取ると、又家根へ飛んで行つて、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、

父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんも、

わたしの骨をのこらず拾つて、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイット、キーウイット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

歌つてしまうと、鳥はまた飛んで行きました。右の趾には鎖を

持ち、左の爪に靴を持って、水車小舎の方へ飛んで行きました。

水車すいしやは、「カタンーコトン、カタンーコトン、カタンーコトン、カタンーコトン  
。」と廻まわっていました。小舎こやの中なかには、二十人にんの粉こなひき男おとこが、白うす  
の目めを刻きって居いました。

「カタンーコトン、カタンーコトン、カタンーコトン、カタンーコトン」と水車すいしや  
の廻まわる間あいだに、粉こなひき男おとこは、「コツ、コツ、コツ、コツ、コツ、コツ、コ  
ツ」と白うすの目めを刻きって居いた。

鳥とりは水車すいしや小舎こやの前まえにある菩提樹ぼだいじゆの上うえへ棲とまって、歌うたい出だしまし  
た。

「母かあさんが、わたしを殺ころした、」  
と歌うたうと、一人ひとりが耳みみを立たてました。

「父とうさんが、わたしを食たべた、」

と言いうと、また二人が耳を立てて、聞き入りました。

「妹のマリちゃんが、」

と歌うたうと、また四人が耳を立てました。

「わたしの骨をのこらず拾ひろつて、

手巾に包つつんで、」

と言いった時には、白を刻きっている者は、八人ぎりになりました。

「杜松の樹の」

と歌うたうと、もう五人ぎりになりました。

「根元へ置おいた。」

と言いうと、もう一人ぎりになりました。

「キーウイット、キーウイット、何と、綺麗な鳥でしょう！」



と歌うと、その一人も、とうとう仕事を止めました。そしてこの男は、最後までだけしか聞かなかつた。

「鳥や、」とその男が言った。「何て好い声で歌うんだ！ おれにも、初から聞かしてくれ。もう一遍、歌ってくれ。」

「いやいや、」と鳥が言った。「ただじゃア、二度は、歌いません。それとも、その石臼を下さるなら、もう一度、歌いませう。」

「いかにも、」とその男が言った。「これがおれ一人の物だったら、お前にやるんだがなア。」

「いいとも、」と他の者が言った。「もう一遍、歌うなら、やつてもいいよ。」

すると鳥は降りて来たので、二十人の粉ひき男は、総ががかりで、「ヨイシヨ、ヨイシヨ！」と棒でもって石臼を高く挙げました。鳥は真中の孔へ頭を突込んで、まるでカラーのように、石臼を頸へはめ、又木の上へ飛上って、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、

父さんが、わたしを食べた、

妹のマリちゃんも、

わたしの骨をのこらず拾って、

手巾に包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイット、キーウイット、何と、綺麗な鳥でしょう！」

歌うたつてしままうと、鳥とりは羽はねをひろひひろげて、右みぎの趾あしには、鎖くさりを持もち、左ひだりの爪つめには、靴くつを持もち、頸くびのまわりには、石いし白しろをはめて、お父とうさんの家うちの方ほうへ飛とんで行ゆきました。

居間いまの中なかでは、お父とうさんとお母かあさんとマリちゃんまりちゃんが、食卓テーブルの前まえに坐すつていまました。その時とき、お父とうさんはこう言いいまました。

「おれは胸むねが軽かるくなつたようで、大たい変へん好い気き持もちだ！」

「否いいえ、」とお母かあさんが言いつた。「わたしは胸むねがどきどきして、まあらしくも来くる前まえのようですわ。」

けれどもマリちゃんまりちゃんはじつと坐すつて、泣ないていまました。すると鳥とりが飛とんで来きて、家根やねの上うへへ棲とまつた。

「ああ、」とお父とうさんが言いつた。「おれは嬉うれしくつつて、仕方しかたがな

い。まるでこう、日がぱーツと射してでも居るような気持だ。まるで久しく逢わない友達にでも逢う前のようだ。」

「否、」とお母さんが言った。「わたしは胸が苦しくって、齒がガチガチする。それで脈の中では、火が燃えているようですわ。」  
 そういつて、おかみさんは衣服の胸を、ぐいぐいとひろげました。  
 マリちゃんは隅っこへ坐つて、お皿を膝の上へおいて、泣いていたが、前にあるお皿は、涙で一ぱいになるくらいでした。

その時、鳥は杜松の木へ棲まつて、歌い出しました。

「母さんが、わたしを殺した、」

母親は耳を塞ぎ、眼を隠して、見たり、聞いたり、しないようにして、耳の中では、恐ろしい暴風の音が響

き、眼めの中なかでは、まるで電いなびかり光ひかりのように、燃もえたり、光ひかりつたり  
 していました。

「父とうさんが、わたしを食たべた、」

「おお、母かあさんや、」とお父とうさんが言いった。「あすこに、綺きれい麗なな  
 鳥とりが、好いい声こえで鳴なっているよ。日ひがほかほかと射さして、何なにもかも、  
 肉にく桂けいのような甘あまい香かおり気がする。」

「妹いもうとのマリちゃんが、」

と歌うたうと、マリちゃんきゆうは急かおに顔かおをあげて、泣なくのをやめました。  
 お父とうさんは

「おれはそばへ行とって、あの鳥とりを、ようく見みて来くる。」というと、  
 「あれ、およしなさいよ！」とおかみさんが言いった。「わたしは

まるで家じゆうに火がついて、ぐらぐらゆすぶれてるような気がするわ。」

けれどもお父さんは出て行って、鳥を眺めました。

「わたしの骨をのこらず拾って、

ハンケチに包んで、

杜松の樹の根元へ置いた。

キーウイツト、キーウイツト、何と、綺麗な鳥でしょう！」

こう歌うと、鳥は黄金の鎖を、お父さんの頸のうえへ落しました。

その鎖はすつぽりと頸へかかつて、お父さんによく似合いました。

お父さんは家へ入って、

「ねえ！ とても美しい鳥だよ。そしてこんな綺麗な、黄金の鎖

を、わたしにくれたよ。どうだい、立派りつぱじゃないか。」

「いいましたが、おかみさんはもう胸むねが苦くるしくて堪たまらないので、部屋へやの中なかへぶつ倒たおれた拍子ひょうしに、帽子ぼうしが脱ぬげてしまいました。すると鳥とりがまた歌うたい出だしました。」

「母かあさんが、わたしを殺ころした、」

「おお、」と母親ははおやは呻うめいた。「わたしは千丈じょうもある地じの底そこへでも入はいつていたい。あれを聞きかされちやア、とても堪たまらない。」

「父とうさんが、わたしを食たべた、」

「というと、おかみさんは、まるで死しんだように、ぼったりと倒たおれました。」

「妹いもうとのマリちゃんが、」

「ああ、」とマリちゃんが言った。「わたしも行つて見ましよう。鳥とりが何なにかくれるかどうだか、出でて見みるわ！」  
 そう言いつて、外そとへ出でました。

「わたしの骨ほねをのこらず拾ひろつて、

手はんけち巾つつへ包つんで、」

と言いつて、鳥とりは靴くつを妹いもうとの上うへへ落おとしました。

「杜松ねずの樹きの根元ねもとへ置おいた。

キーウイット、キーウイット、何なんと、綺きれい麗れいな鳥とりでしよう！」

と歌うたうと、マリちゃんも忽たちまち、軽かるい、楽たのしい気き分ぶんになり、赤あかい靴くつを穿はいて、踊おどりながら、家うちの中なかへ跳とび込んで来きました。

「ああ、」とマリちゃんが言いった。「わたしは、戸おもて外でへ出でるまで



は、悲<sup>かな</sup>しかつたが、もうすつかり胸<sup>むね</sup>が軽<sup>かる</sup>くなつた！ あれは氣<sup>き</sup>前の<sup>まえ</sup>のいい鳥<sup>とり</sup>だわ、わたしに赤<sup>あか</sup>い靴<sup>くつ</sup>をくれたりして。」

「いいえ、」といつて、お母<sup>かあ</sup>さんは跳<sup>は</sup>ね起<sup>お</sup>きると、髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>を焰<sup>ほのお</sup>のように逆<sup>さか</sup>立<sup>だ</sup>てながら、「世界<sup>せかい</sup>が沈<sup>しず</sup>んで行<sup>ゆ</sup>くような氣<sup>き</sup>がする。氣<sup>き</sup>が軽<sup>かる</sup>くなるかどうか、あたしも出<sup>で</sup>て見<sup>み</sup>みましょう。」

そう言<sup>い</sup>つて、扉<sup>とぐち</sup>口<sup>で</sup>を出<sup>ひ</sup>る拍<sup>ひ</sup>子<sup>ようし</sup>に、ドシーン！ と鳥<sup>とり</sup>が石<sup>い</sup>臼<sup>しうす</sup>を頭<sup>あたま</sup>の上<sup>うへ</sup>へ落<sup>お</sup>つたので、おかあさんはペしやんこに潰<sup>つぶ</sup>れてしまひました。その音<sup>おと</sup>をきいて、お父<sup>とう</sup>さんと娘<sup>むすめ</sup>が、内<sup>うち</sup>から跳<sup>と</sup>出<sup>びだ</sup>して見<sup>み</sup>ると、扉<sup>と</sup>の前<sup>まえ</sup>には、一<sup>めん</sup>面に、煙<sup>けむり</sup>と焰<sup>ほのお</sup>と火<sup>ひ</sup>が立<sup>た</sup>ちのぼつて居<sup>い</sup>ましたが、それが消<sup>き</sup>えてしまつと、その跡<sup>あと</sup>に、小<sup>ちい</sup>さな兄<sup>にい</sup>さんが立<sup>た</sup>つていまひた。兄<sup>にい</sup>さんはお父<sup>とう</sup>さんとマ<sup>て</sup>リちゃんの手<sup>て</sup>をとつて、みんなそろつ

て、よろこいさ喜び勇んで、うちはい家へ入り、  
テーブル食卓のまえ前へすわ坐つて、  
一しよにしよく食

事じをいたしました。

# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集」富山房

1938（昭和13）年12月12日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 杜松の樹

## グリム

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫  
著者 中島孤島訳  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

#### Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>